



明峰

令和8年4月21日

第 2 号

校長 岡野利男

※いよいよ、体育大会に向けての練習が本格化してきます。御家庭においては、毎日の洗濯や水筒の準備等、よろしく願います。なお、「持ち物に氏名を記入すること」徹底してください!!

「長閑」は春の季語

先日、気象庁が最高気温40度以上の日の名称を「酷暑日」と発表したことを御存じの方も多いでしょう。そのことに触れた新聞記事で、次のくだりを見つけました。

痛ましい事件で社会全体が「酷」の一字に揺れている。長閑、春灯(春の夜の灯)、鼓草(タンポポ)…。今は春の言葉をかき集めて、ほんのしばらく心を休める。

一文目はまさにその通りです。世界各地の争いに目を向けても、国内の痛ましい事件にも「酷」の字が私たちの心に影を落とします。その事実から目を背けることも、忘れることもなりません。ただ、この学校だよりでは少し距離を置きましょう…。

日本語は美しいですね。「長閑」「春灯」「鼓草」それぞれの春の季語に、改めて心が洗われる気がしました。皆さんはいかがでしょう。

長閑(のどか)は、春の季語。多くの人が、「長い閑(ひま)=満ち足りた静けさ…? とんでもない! 年度の変わり目は、仕事に・会合に・付き合いに急かされるだけ!!」ですよ。もちろん、私もそうです。そうなのですが、17日の歓迎遠足は、実に「のどか」でしたよ〜。3年生が立派に“最上級生”としての立居振る舞いで下級生をリードし、2年生が持ち前の人懐っこさで潤滑油の役割を果たし、1年生がその言動の一つ一つに初々しさを醸していて…。本当に「のどか」な一日でした。自称「雨男ではない」私は、遠足の出発前に職員に「雨は降りません」と豪語しましたが、本当にパラッと来た程度でした。すごいでしょ!!(自画自賛…。)

始業式では、2年生・3年生に、「始まりの時に費やすエネルギー」について話をした私です。そのタイミングを逃さないこと、スタートダッシュの必要性を話したところ。もちろん、そのことを否定するつもりもありませんが、でも「長閑」は春の季語。

うらかな春に浸りいる心の穏やかさも必要ですよ。諫早公園のつつじも、そして、眼鏡橋も、とてものどかで素敵でした。ご報告まで。



落ちるリンゴを待つな。

ご存知の保護者の方がいらっしゃったら嬉しいな…。この言葉は、2012年(平成24年)4月2日の全国紙に掲載された、洋酒・ビールで有名な大企業「サントリー」の広告に使われたものです。

サントリーの広告と聞けばピンと来た人もいらっしゃるでしょう。執筆者は、稀代の粹人作家、伊集院静さん(2023年11月24日 没)。伊集院さんは、20年以上、4月初めのサントリー広告で、「新社会人へ」のエッセーを綴ってこられました。

著作権の関係で原文を載せられないのが残念ですが、2012年のエッセーも例年と同じく「新社会人おめでとう。君は今どんな職場で出発の日を迎えただろうか。」と大人の雰囲気が始まります。

続いて、前年3月、大震災が襲った東北について触れておられるのですが、あるリンゴ園の老人が口にした言葉にスポットが当てられます。その言葉こそ表題の「落ちるリンゴを待つな。」なのです。

◇リンゴらしい時に木から取ってやること

◇落ちてからでは、リンゴではなくなる

◇それは仕事にも置き換えられること。

◇木に登ってリンゴを取りに行こうじゃないか

等々のことが、伊集院さん独特の語り口で、粹に綴られています。

私にとっての2012年4月は、初めて“教頭職”に就いた時であり、だからこそ、社会人として新たな経験をしたことも手伝って、余計にサントリーの広告が頭に残っているのでしょう。

括りの「風に向かえ。苦節に耐えろ。常に何か挑む姿勢が、今、この国で大切なことだ。」の一節は今も目頭が熱くなる思いがします。この新社会人へのメッセージの頃は、誰も心に、前年の大震災が痛みを伴って残った状態でしたから…。

先日、土曜の夕刻、ほろ酔い加減で「今年の伊集院さんの『働く君へ』の広告は何かな。」と調べようと思い、すぐに「そうか、亡くなられたのだった」と思い直して、寂しくなりました。

4月の夕方は、何とも言えない哀愁を感じる瞬間があるものです。かっこつけ過ぎですかね…。

